

イエールオリンピックウィーク (2006年4月22日ー28日)

南仏、マルセイユとニースの間にイエールというリゾートがあります。第38回になるイエールオリンピックウィークには50カ国、1000隻を超える参加がオリンピック種目のスター級を除く10種目とパラリンピックの2.4m級を加えた11種目にありました。

日本からは470男子3艇、女子3艇、レーザー男子4艇、ラジアル女子2艇、49er1艇、イングリッド1艇、RSX女子1艇の7種目に合計15艇が出場しました。この大会は国際セーリング連盟がグレード1に指定している大会で、ヨーロッパで開催される大会の中でも、最新のシステムで運営されます。5海面、11クラスの運営を非常に合理的に行い、前回からは北京五輪で採用されるメダルレースの実施にも取り組み始めています。4月後半というと、寒気の吹き出しによるミストラルが吹き荒れるか、アフリカから夏の空気が近づいて穏やかに晴れるか、どちらかになるわけですが、今年はあまり強い風が吹かない、まったりモードのイエールとなりました。

レース初日は470女子が5位以内に3艇、470男子もトップ10に2艇が入る素晴らしい滑り出しでしたが、470は男女ともふんばりを見せて、初日にトップにたった吉迫・大熊組はトップと2点差の2位で銀メダルを獲得しました。詳細はJSAFのHPに毎日のレースレポートが掲載されていますので、そちらをご覧ください。 (<http://www.jsaf.or.jp/sailing/2006/hyeres/>)

「470女子は、メダルレースの順番が最後だったので、時間ぎれでスタートできませんでした。トップのイスラエルとは2点差、後ろとはだいぶあいていたので、メダルレースで逆転すること、勝つことだけを考えていました。中止が決まった時は、がっかりでした。悔しかったです。(吉迫)」と、実際には悔しさが残った結果でしたが、それでも、ワールドチャンピオンやランキング上位の選手が全てそろった中での銀メダルです。「表彰式の時間を間違えていて、雨の中で翌朝の出発の準備で船の積み込みをしていたら、始まったからとよびにこられてしまいました。ウェットスーツだったのですが、そのままいいからって。でも、表彰台で前に出て、やっと嬉しさが実感できました。(大熊)」



男子470も関・柳川組がメダルレースで3位をとり、総合で7位に入りました。86艇のビッグフリートの中で、BFDでの失格をかかえながらも、きちんと結果につなげてきたところは見事でした。イエールでの470チームを中村コーチは、「470は今大会でトップ10に3艇入りました。悪いところを上げればまた沢山ありますが、弱い風でのレースなら、日本チームは底力がついてきた様に思いました。昨年のNT合宿では基礎的な部

男子で今シーズン負けなしのイスラエルを追う関・柳川組 (写真:中村健次)

分を重点強化としましたが、特に上位に入ったチームはスタートで負けなくなったということが大きな進歩ではないでしょうか。これからやらなければならない事は「自信」です。やはり目的の明確化・課題の把握をしっかりと、それを克服する事が「自信」に繋がり、それがレースに現れてくると思います。」

シングルハンドのレーザー級男子とラジアル級女子は苦戦が続きました。レーザーは4フリートに分かれての予選がありますから、まず予選レースでトップ10を走り続けられない限り、決勝で上位フリートに残ることができません。そして、そのためには、積極的なスタートからスタートダッシュをすることをこの大会での目標に設定していました。飯島、永井は積極的に飛び出し、BFDをとられたりもしましたが、それでもひるむことなく、前へ出ることを続けました。470同様、スタートで負けなくなるのが第一です。今回のトライが直接結果にはつながっていませんが、ひるまない気持ちを習得できたのは大きな進歩です。

ラジアル級女子は石川が軽風なら中盤を走ることができましたが、10ノットを超えると苦しくなります。勝ちパターンを考えるなら、軽風では必ずトップを走れるように技を磨くことと、吹いても20番を走れるように体力と体重をつけることでしょう。ラジアル級では上位を走る選手が今年のユースワールドで争っていたアメリカと中国です。経験よりも、体力と勢いが重要なのがこのクラスの特徴です。



(写真: 中村健次) ** イングリングの争いはシビアーです。艇差が少ないからでしょうか。**
プリンセスソフィアに続いてイングリッドで重・堀内・名倉組が少しずつ安定した走りをつかんできました。イエールにはアメリカほか海外のトップチームが揃いましたから、レースをしながら情報を集め、走りを磨くチャンスになりました。孤軍奮闘の日本チームにとって、とにかく乗り込むことが必要です。



(写真: Gilles Matin Ragat)

イエールから参加したRSX女子の小菅は52艇という数に圧倒されました。RSX級が五輪種目になってから、中国遠征やセイルメルボルンで試合にもでてきましたが、ヨーロッパの大会はこれが最初で、接戦の中でのダガーボードの使い方、走らせ方のチェンジのタイミングなどなど、細かい技術的なことを大会中に他の選手から盗み見るので精一杯でした。しかし、最終レースでは9位と、初シングルに入ることができ、成績以上に得ることの多い大会でした。

49erの石橋・牧野組は15ノットのコンディションでは厳しい洗礼をうけました。レースどころではなかった前半でしたが、少し風が弱くなった後半は自分達のレースができるようになり、シルバーフリートのレースでは上位を走ることもできました。470とレーザーからの転向コンビで、イングリッド同様、乗り込みと混戦レースでの実践練習が必要です。

イエール終了後、イングリッドは帰国、6月中旬から2回目の遠征で世界選手権に参加となります。470、49er、RSX女子はイタリアのガルダ湖で強化練習を行い、そのまま5月10日からのISAFワールドゲームに参加(各国から2艇の参加のため、3番以下のチームは練習終了後に帰国)します。レーザー級はコンテナ積み込みの後、ワールドゲームへ参加のため、オーストリアへ移動となります。